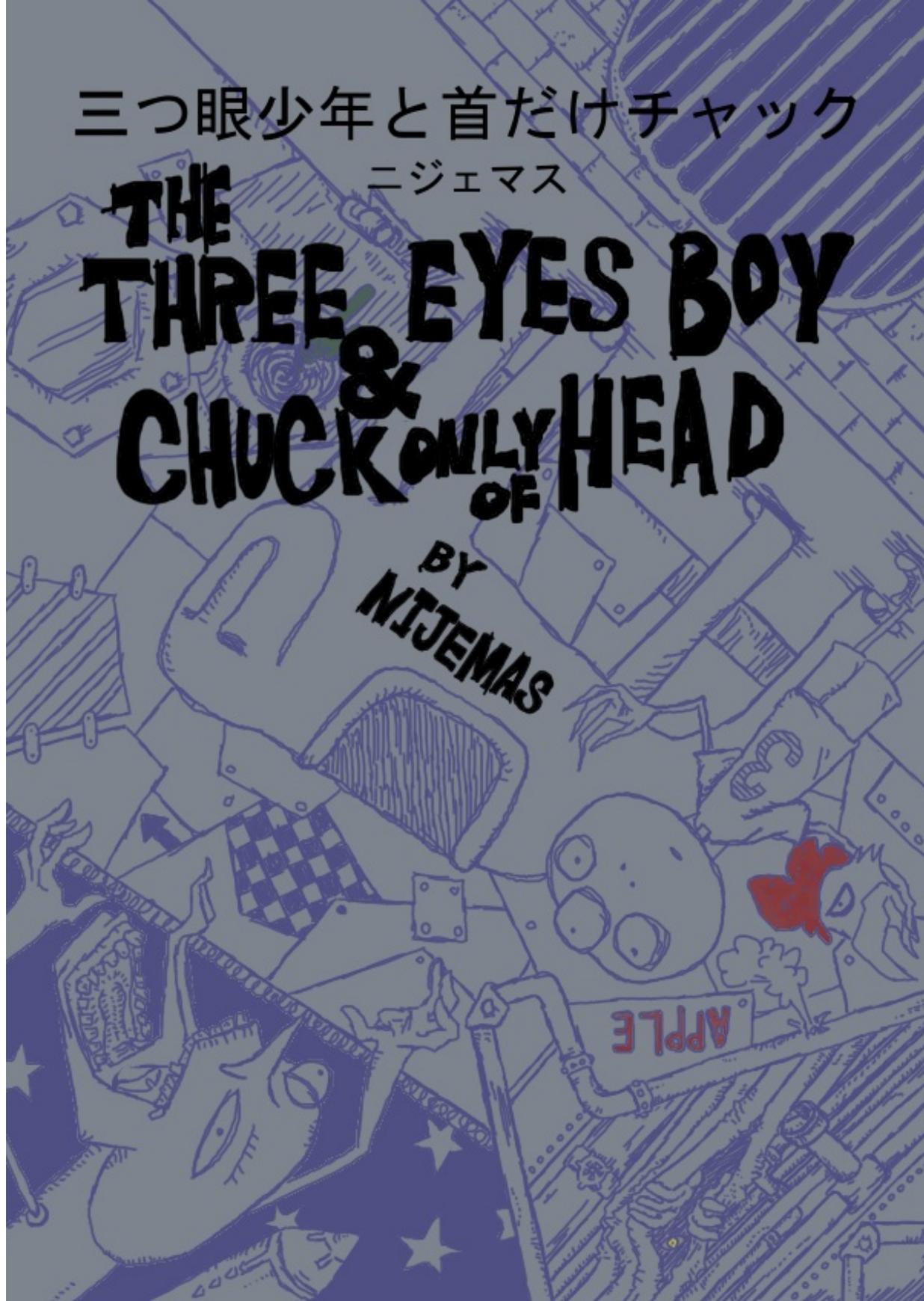


三つ眼少年と首だけチャック

ニジェマス

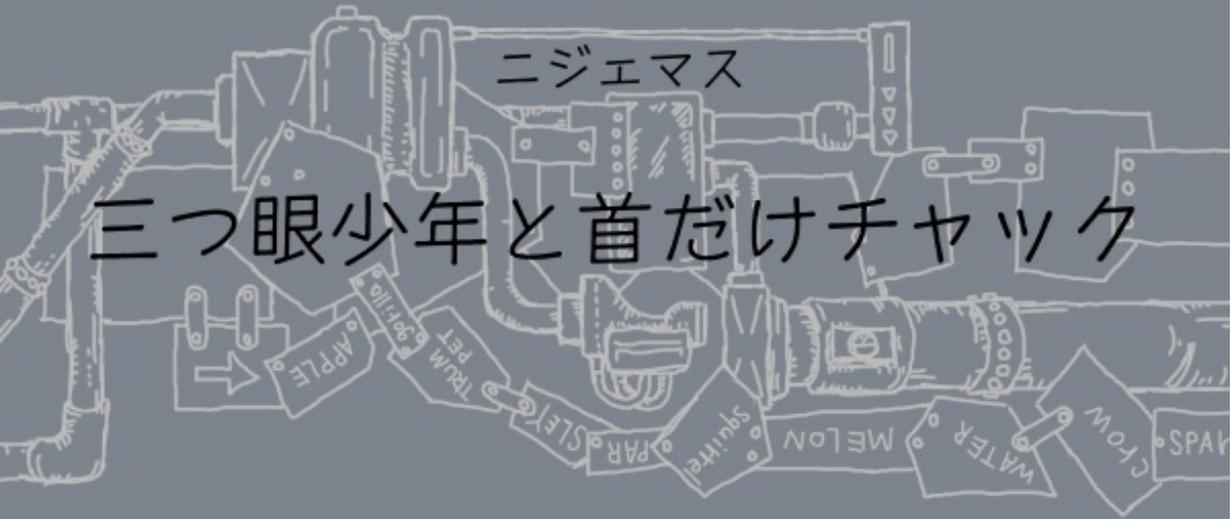
THE
THREE EYES BOY
&
CHUCK ONLY OF HEAD

BY
NIJEMAS

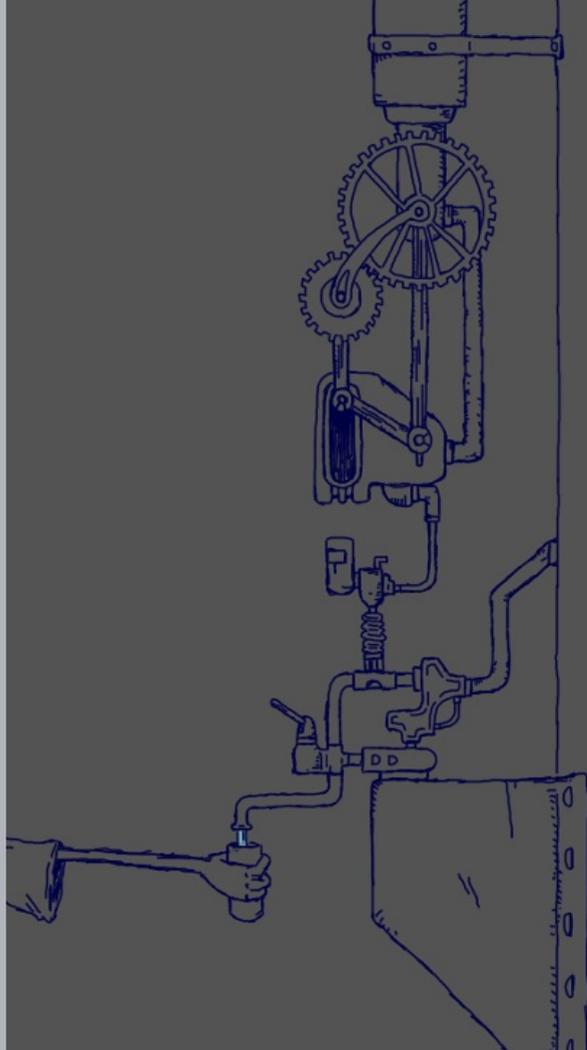


ニジェマス

三つ眼少年と首だけチャック



それは、まだ世界が時計の針で動いていた時代。
ある町に、眼を三つ持つ少年が住んでいました。



少年には両親がいません。
町外れの小さな家で、一人で暮らしていました。

そんな少年の夢は立派な大人になって、結婚して、家族みんなで幸せに暮らすことです。地味な夢かもしれませんが、少年はいつも、そんな暮らしを夢見ています。

ある日、朝早く少年の家を誰かが訪ねて来ました。

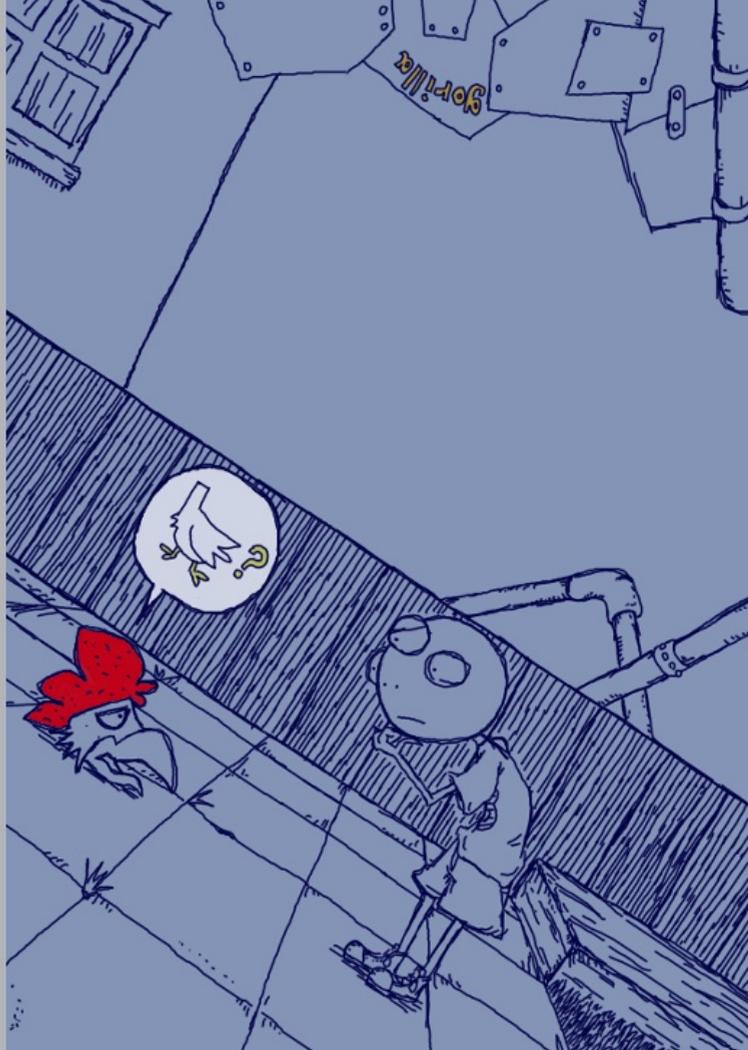
少年には見当がついています。
こんな朝早くに来るのはニワトリのチャックしかいません。
少年とチャックは昔からの友達です。

なので少年はチャックのことをよく知っています。ですが、今日のチャックは誰が見たって変です。



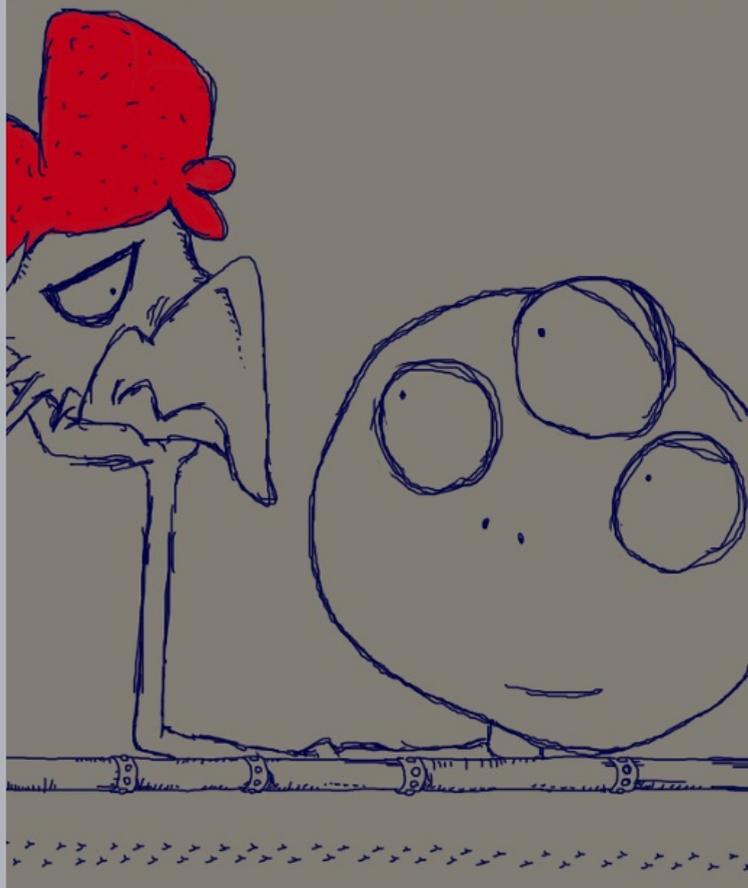
昨日まであったはずの体がなくなり、首だけ
になっているのです。

「なあ、オイラの体、知らないかい？」



少年はもちろん知りません。
もし首のないニワトリを見ていたら、忘れる
はずありません。

少年はチャックの首を手の平に乗せて、一緒
に体を捜すことにしました。
足跡を辿って行けば、きっと見つかるはずで
す。



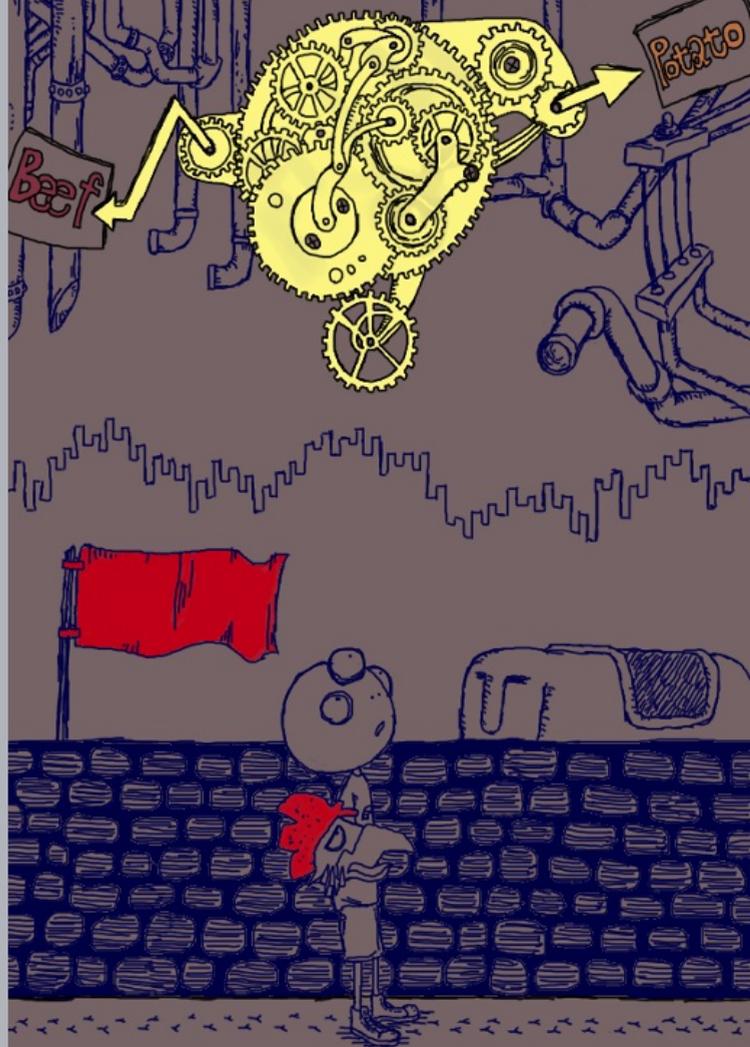
足跡を辿っている途中で、時計を見つけました。
世界でただ一つの時計です。

少年は以前、時計が時刻を指すことで、時の流れが生まれていると聞いたことがありました。

ですが、初めて間近で見る時計は、なんだか聞いた話と違うような、違和感を感じました。

ですが、今はそんなことを気にしている場合ではありません。
少年は足跡を辿っていき、その場を後にしました。

しかし、世界にはある変化が起きていたので

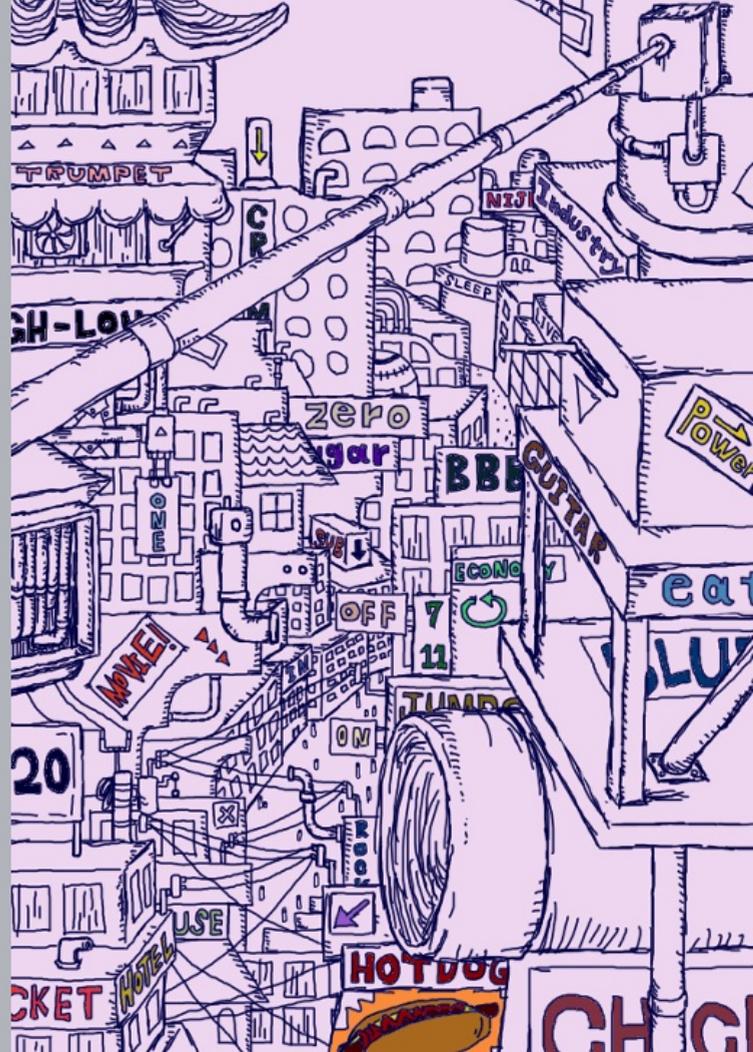


しばらく歩くと土の地面はコンクリートの道に変わり、大きな街に辿り着きました。

「おいおい、足跡が消えちまった！
どうすんだよ？」

チャックの言う通り、コンクリートの道には足跡は残っていません。
ですが街に入ったのは間違いないでしょう。

たくさんの方がいるので、もしかしたら誰かがチャックの体を見ているかもしれません。
少年は聞き込みを試みることにしました。



ところが、どれだけ聞いても、誰もチャックの体のことは知らないようです。それどころか、あまり相手にしてもらえません。

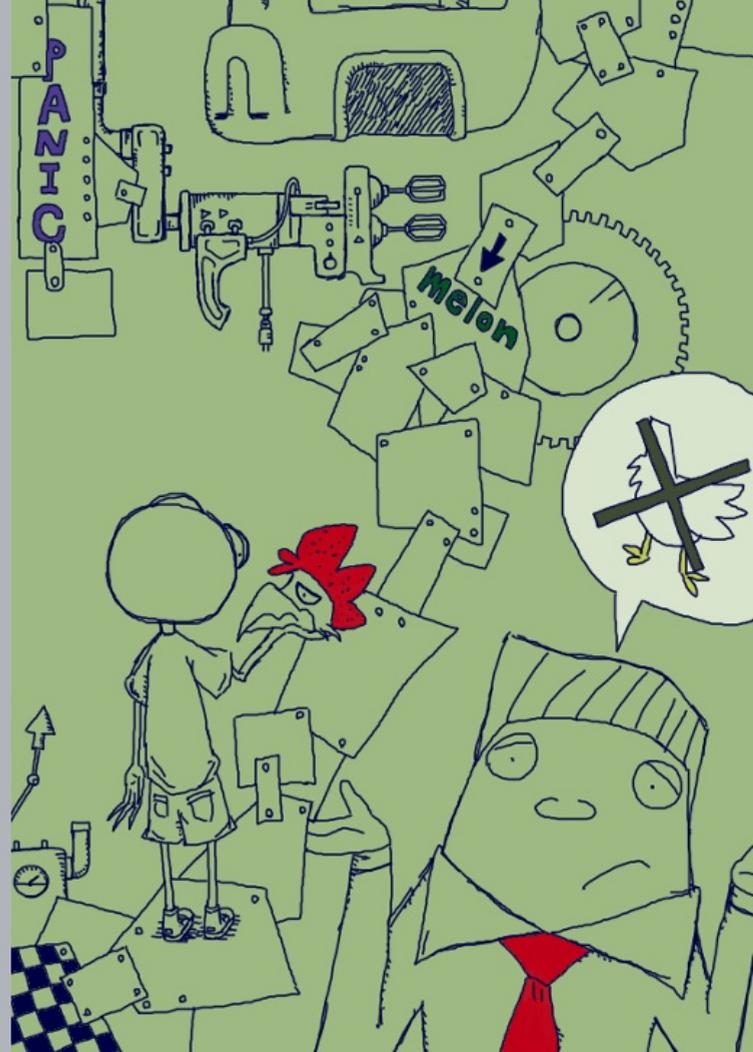
「え？首のないニワトリの体？
そんなの知らないよ」

そう答えた男の人もなにか不安そうな様子です。話を聞いてみると、なんと時間が止まってしまったというのです。とても信じられない話ですが、確かに今朝から太陽の位置が変わっていないようです。ですが、時間が止まったからといって、何をすればいいのかも分かりません。

それにチャックにとっては、体がなくなってしまったことのほうが大事件なのです。

「とはいえ、オイラ腹減ったよ。
腹はないけどさ」

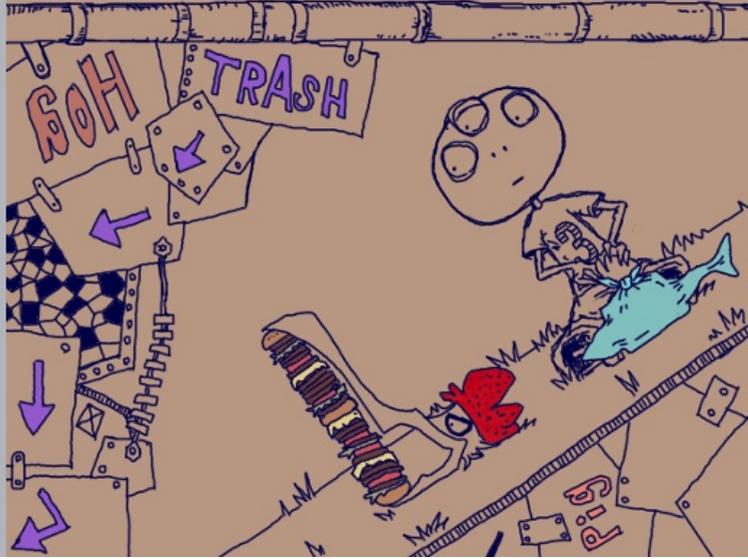
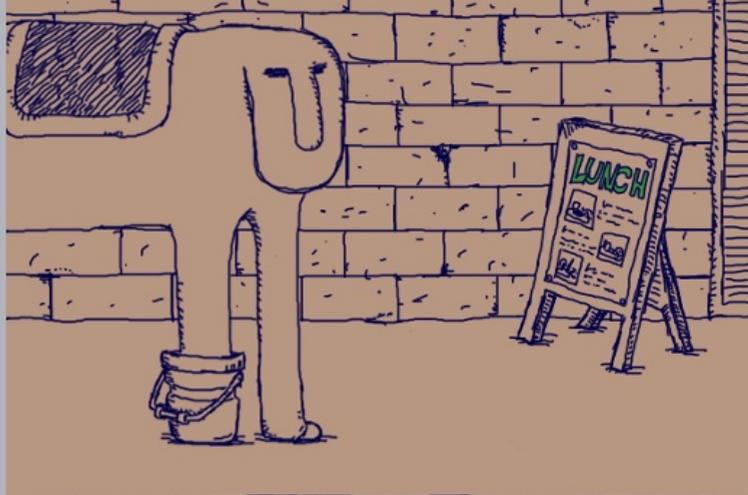
チャックの言葉で、少年も朝から何も食べていないことに気づきました。



少年とチャックは、さっそく昼食をとることにしました。

「時間が止まってるなら、昼も夜もないけどね」

チャックは口いっぱいのハンバーガーを、少年は魚のお弁当を食べました。



昼食を終え、少年が聞き込みを再開しようとキョロキョロしていると、不思議に思ったのか二人組みの警察官がやって来ました。

「坊やたち、何してるんだ？」
少し太った警察官が、少年とチャックに話しかけます。

「オイラのどっか行っちゃまった体を捜してるんだ」
チャックが答えました。
すると、少し太った警察官が
「悪いが知らないなあ」
と答え、もう一人のサングラスの警察官も
「ああ、オレも知らん」
と答えました。

それから、少し太った警察官が
「悪いことしてなかったらいいんだ。
まあ頑張れよ」
と言って、通り過ぎて行きました。



「それにしても、アイツはラッキーだったよなあ」

少し太った警察官が、サングラスの警察官に話かけました。

「聞いたぜ。空気の無い牢屋のヤツだろ？」
「それにしても、何でこんなことになったんだか」

「やはり時計じゃないか？」

二人組みの警察官はそんな話をしながら去って行きました。



少年とチャックは、ある場所へやって来ました。
そこはチャックが一番行きたくない場所でした。

チキン料理の店の主人なら、首のないニワトリの体を見逃すことはないはずです。

ですが店主の答えは

「首のないニワトリの“生きた”体？

そんなのは見たことないな」

でした。そして、

「まあもし見つけていたら、今ごろは、ひと

まわり小さくなってただらうがな」

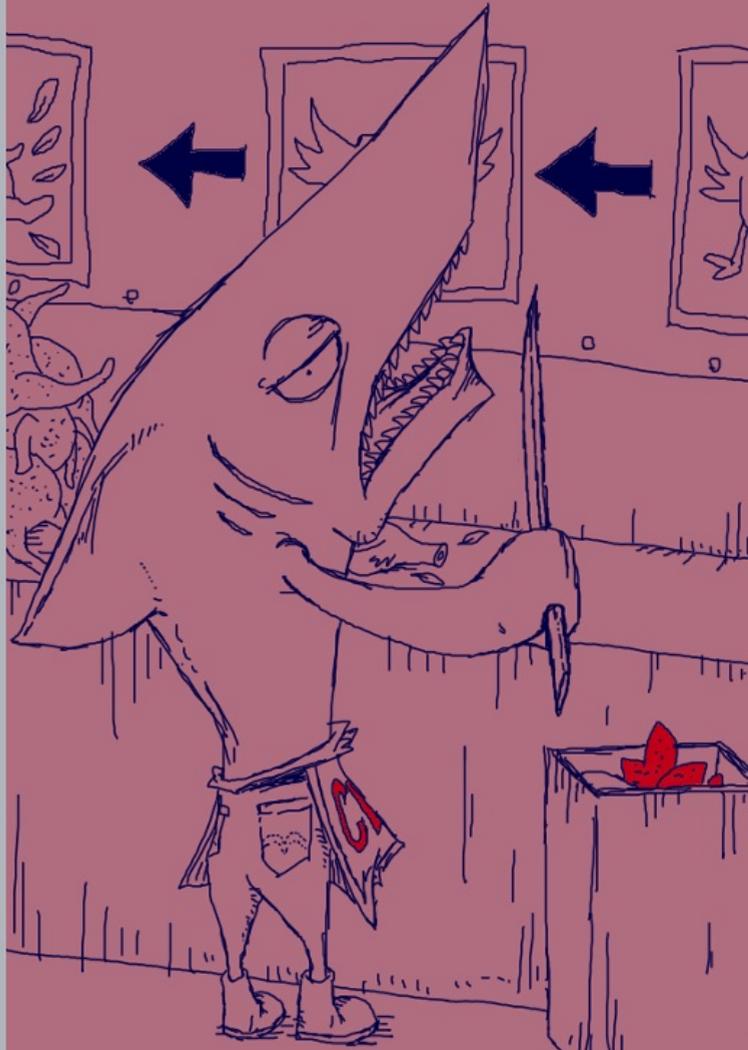
と言って、眼を閉じているチャックを震え上がらせました。

しかし、店主は少し考えてから、こう言いました。

「もしかしたらだが……

ひょっとして、オマエの夢を叶えに行ったんじゃねえか？

考えるよりも先に体が動いたのかもな」



「オイラの夢……？」

チャックは考えました。

そのとき、店の入り口が開き、店主によく似た子どもが入ってきました。

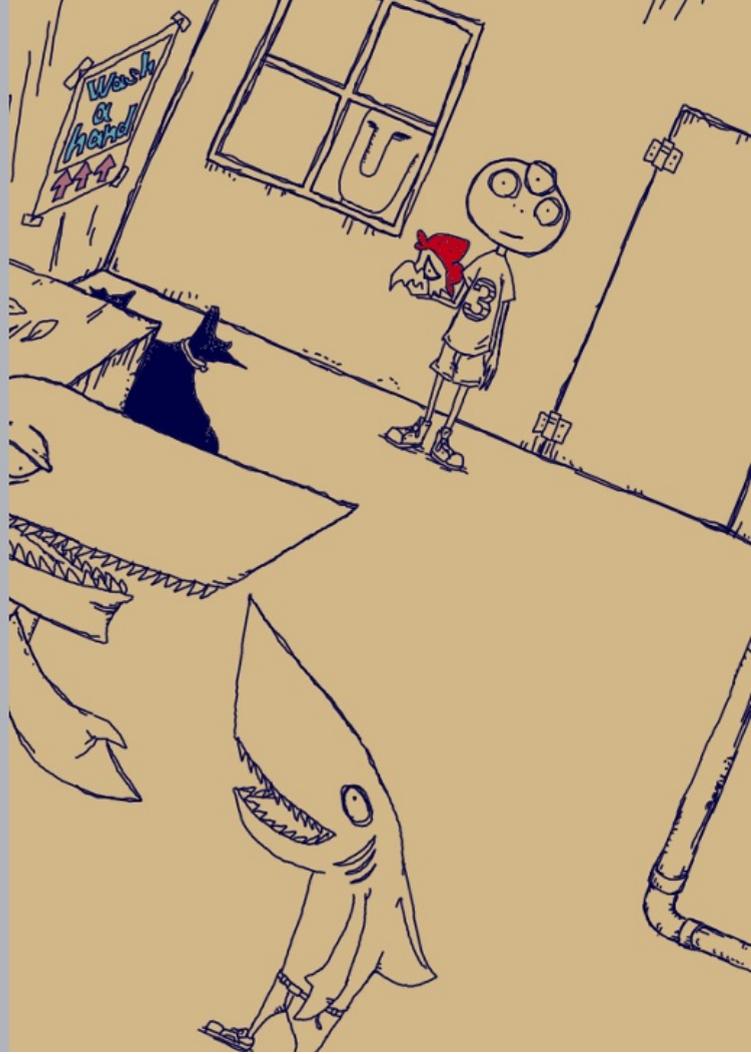
「父ちゃんただいま！」
「おうチビスケ！どうだった？」

息子の帰りに店主は嬉しそうです。

「やっぱりセビレを隠して近づくのって難しいや。すぐ気づかれちゃったよ」
「また今度、父ちゃんが教えてやろう！」
「うん！」

息子も嬉しそうに頷きました。

少年はその光景を見て、とても羨ましく思いました。

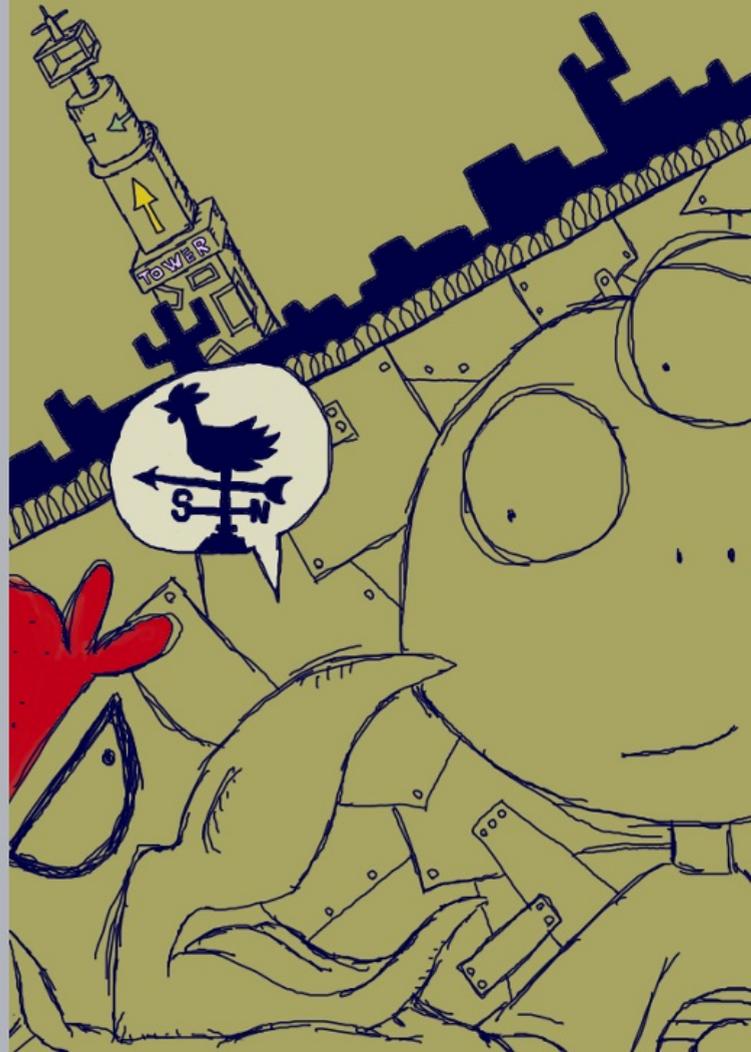


チャックは考えました。

自分の夢がなんなのか。
自分の体は何をしようとしているのか。
“考えるよりも先に動いた体”のことを考えていました。

「もしかしたら、高い場所から景色を見ることかも。風見鶏みたいにする。
ほら、オイラあんまり高いところまで飛べないだろ？」

チャックがそう言うので、少年は街で一番高い塔に登ることにしました。

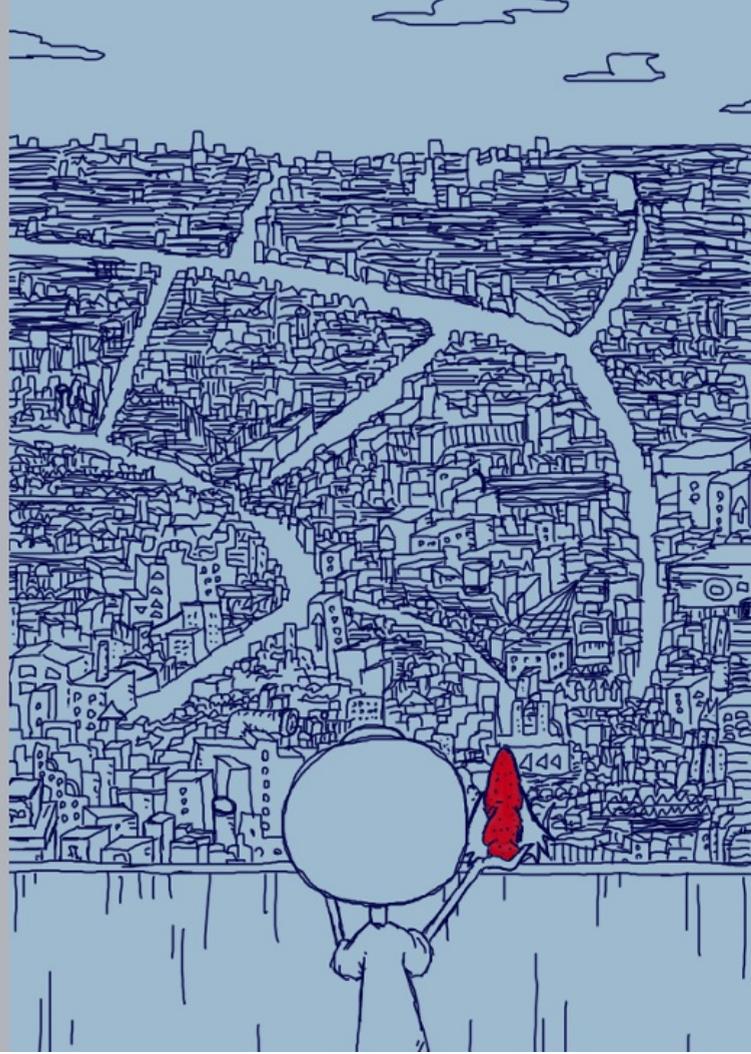


「すげえ〜！」

少年とチャックは目の前に広がる景色に感動しました。
ですが、肝心のチャックの体はどこにも見当たりません。

「でもさ、よく考えたら、体には眼がないから、この景色は見れないよね」

チャックの言う通りでした。



少年とチャックが塔を下りようとした、その
ときです。

突然、街の一角で大きな爆発が起きました。
そこは刑務所でした。



「ワーハッハッハッハ！！
ワシの娘を返してもらおうぞ！！」

刑務所に現れたのは8本脚の男でした。

「あれはスパイダー！！」
壊れた刑務所から脱獄した男が言いました。

「今日の午後、ヤツの娘が出所する予定だっ
たはず」
別の男が言いました。

スパイダーと呼ばれた男はミサイルを自在に
操り、刑務所を破壊していきます。
どうやら、時間が止まって出所が無効になっ
てしまった娘を迎えに現れたようです。



「パパ!?」
囚人服を着たスパイダーの娘が言います。

「おお……!良かった!
もう会えないかと思ったぞ!」

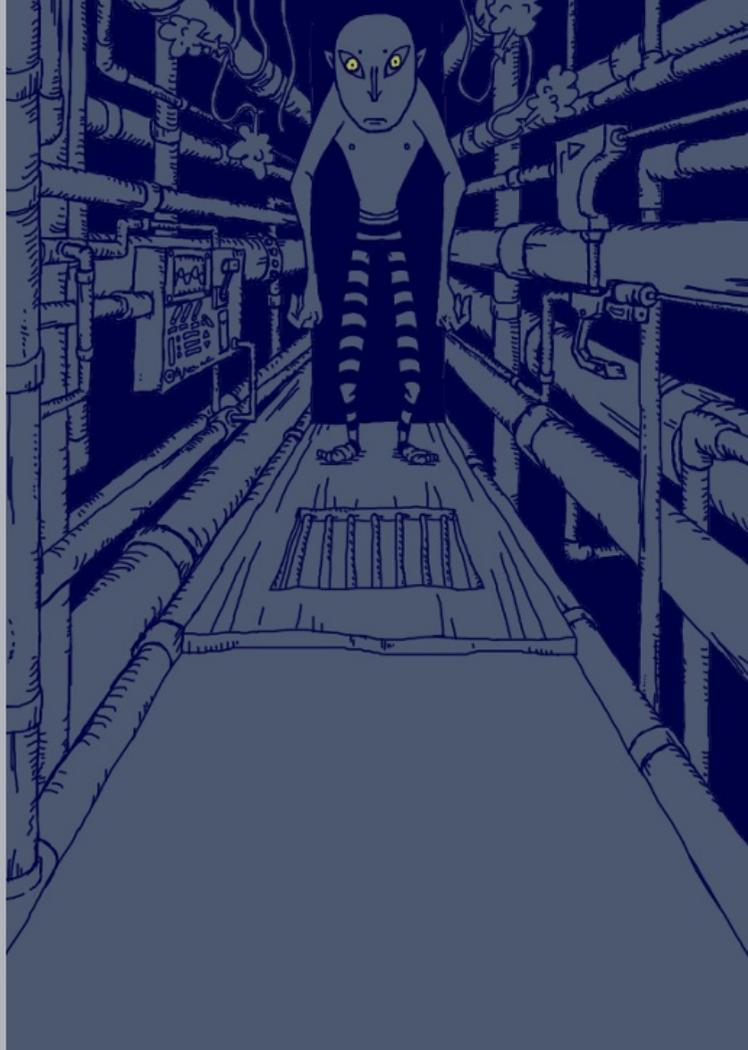
スパイダーが娘との再会を喜んでいると、周
りの騒ぎが大きくなってきました。

「うわああああ!!」
「空気の無い牢屋が壊れた!!」
「黄色い眼の男が出てくるぞー!!」



黄色い眼の男は無表情でした。
ただ、自分がまだ生きていることを確認しました。
そして、自分が生きるために時間を永遠に止めてしまおうと考えました。

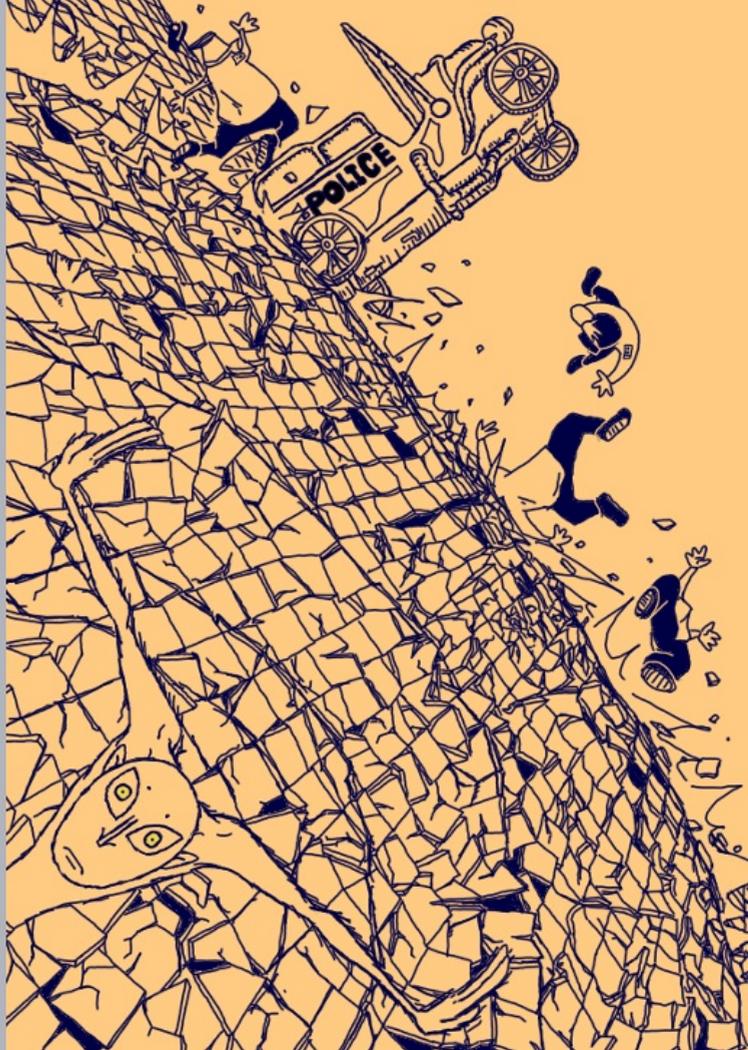
それから深く息を吸い込んで、体の中に空気をたくさん入れました。



黄色い眼の男とスパイダーを捕まえるために
たくさんの警察官がやって来ました。

黄色い眼の男は深く息を吸い込んでから両手
を左右に大きく広げました。

すると、竜巻のような、ものすごい突風が発
生し、周りの人や物が次々と飛ばされていき
ました。



スパイダーは娘を抱えて8本の脚で踏ん張っていましたが、とうとう娘だけ吹き飛ばされてしまいます。



怒り狂ったスパイダーは黄色い眼の男にミサイルを撃ちました。
ですが、黄色い眼の男の右手から発生した風で簡単にはじかれてしまいます。

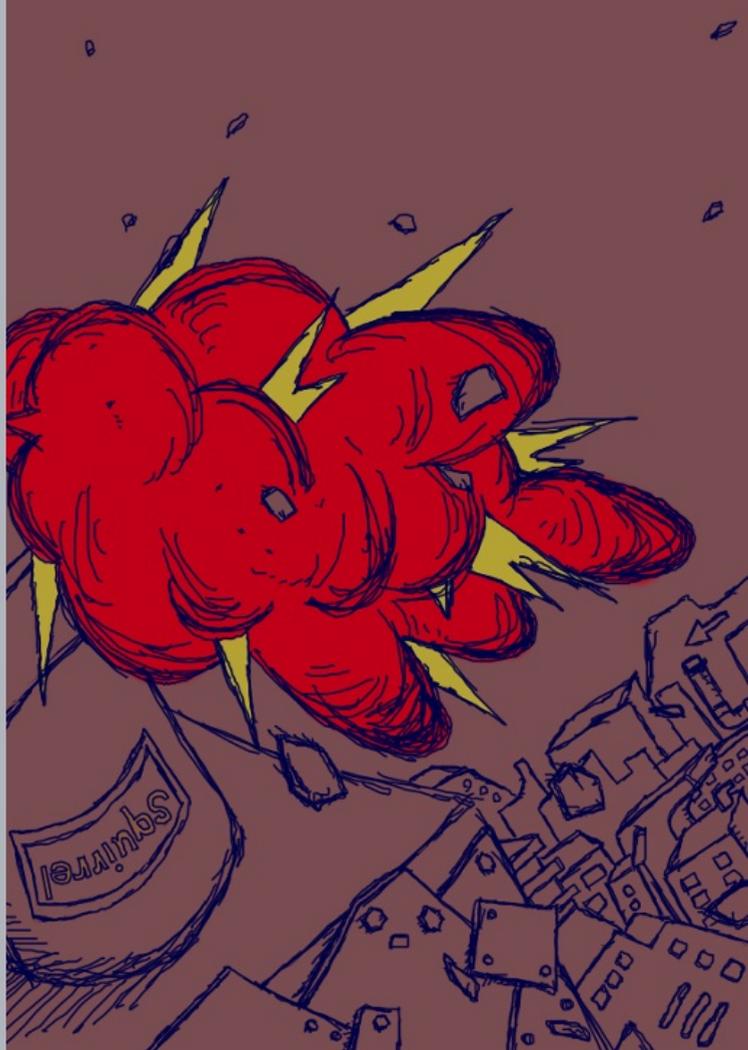
そして、同時にスパイダーに向けた左手からも凄まじい突風が発生しました。



突風は一直線にスパイダーに襲い掛かり、瓦礫と共にスパイダーを吹き飛ばしました。



そして、はじかれたミサイルは、なんと少年とチャックがいる塔に直撃しました。

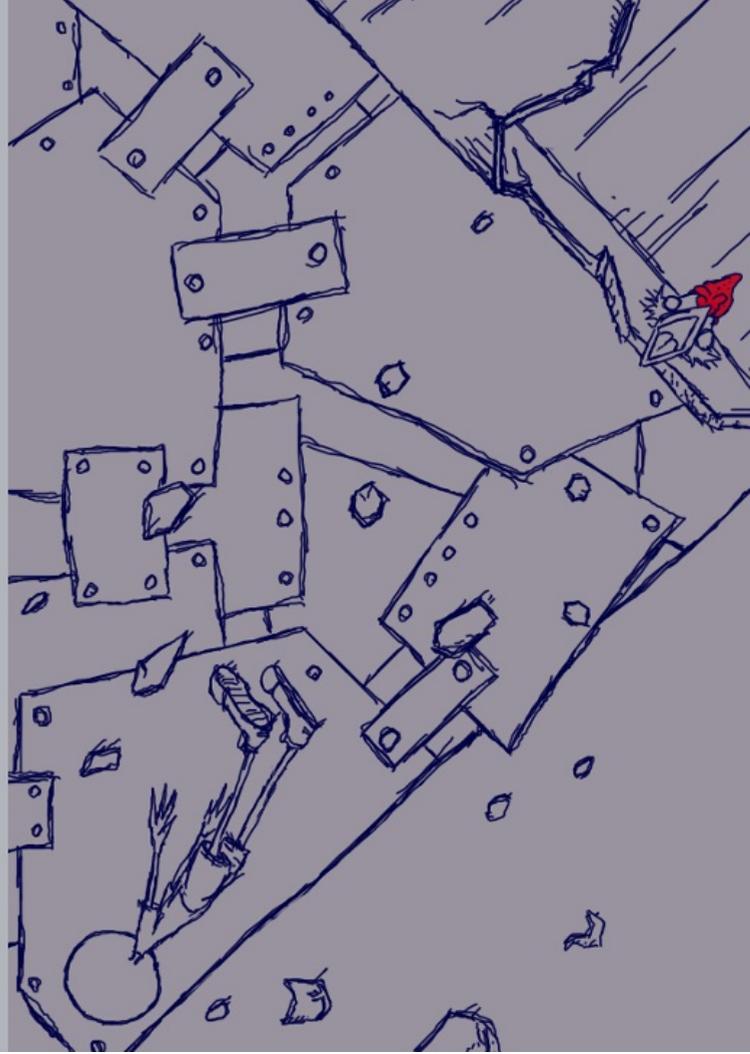


さらに、ミサイルの爆発で塔の一部が崩れました。
それは少年がいた場所です。
少年は、崩れた足場から真っ逆さまに落ちて
いってしまいました。

「わああ！！どうしよう！どうしよう！！」

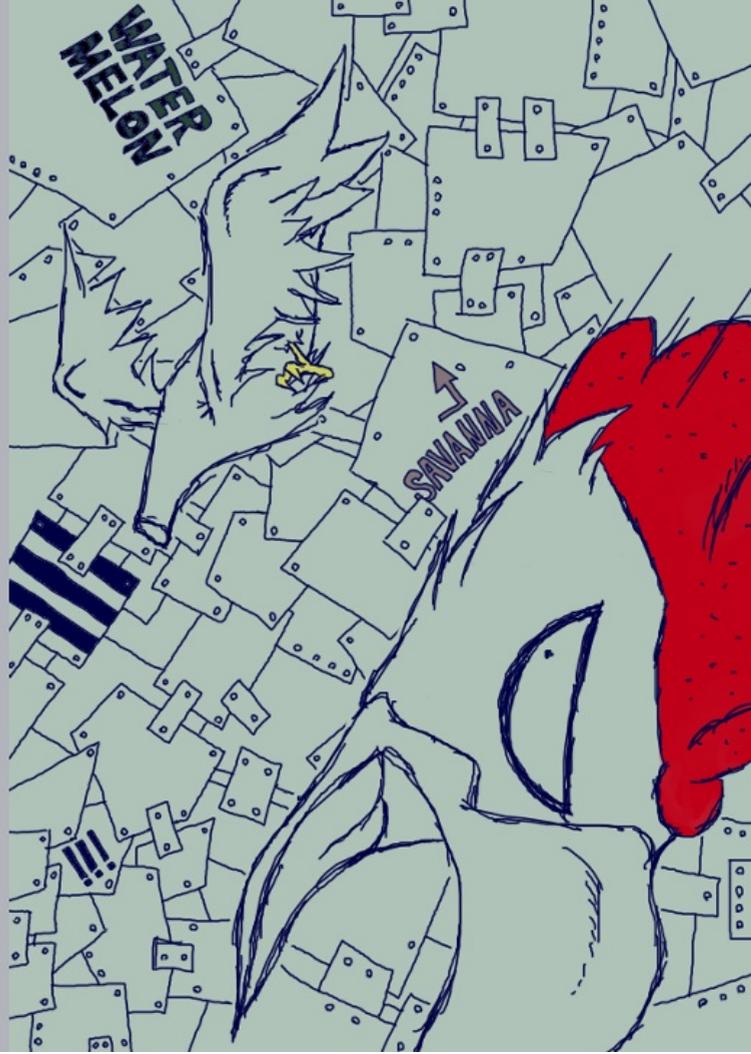
爆発の衝撃で吹き飛ばされていたチャックは
無事でした。
ですが、このままでは少年は地面に墜落して
しまいます。

もう考えている時間はありません。



気がつくと、チャックは少年を助けようと飛び降りていました。
すると、すぐ横を見覚えのある体が飛んでいます。そうです、チャックの体です。

「オイラの体！！協力してくれ！！」



チャックの首と体は空中でくっつきました。
そしてクチバシで少年を捕まえると、翼で空
を飛んで少年を助けることができました。

「そうか！オイラの夢は空を飛ぶことだった
んだ！すごいや！こんなに上手に空を飛べ
るニワトリはきっとオイラだけだぞ！！」

チャックは体を見つけたこと、そして空を飛
べるようになったことに驚き、喜びました。

少年が、チャックの体が見つかったこと、そ
して命が助かったことに安心していると、あ
の二人組みの警察官が現れました。



「やあ君たち、また会ったね。
無事そうでなによりだ」
声を掛けてきたのは少し太った警察官です。
「さっきまで大ピンチだったよ！
結果オーライだけどさ」
そう答えたチャックに
「体が見つかって良かったな」
とサングラスの警察官が言いました。
チャックは少し嬉しそうにしながらも、
「一体なにが起きたのさ？」
と質問します。
少し太った警察官が、黄色い眼の男のことを
話しました。そして、こう言いました。
「どうやら、黄色い眼の男は時計を壊すつも
りみたいなんだ……！」
続けてサングラスの警察官が
「そうだったら時間は止まったまま。
夜も来ないし、誕生日だって来ない。
君たち子どもは、子どものままだ」

「その黄色い眼の男は、どうして時計を壊す
のさ？」
チャックが尋ねます。



少し太った警察官はこう説明しました。
「黄色い眼の男は、体に毒を打たれているんだ。本当なら毒を打たれてから10分後に命を落とすはずだった。
それが、時間が止まってしまったせいで、黄色い眼の男は生きながらえてるんだよ」

そしてサングラスの警察官が
「つまり、時計を壊して時間を永遠に止めてしまえば、アイツが毒で命を落とすことはなくなるのさ」
と付け加えました。

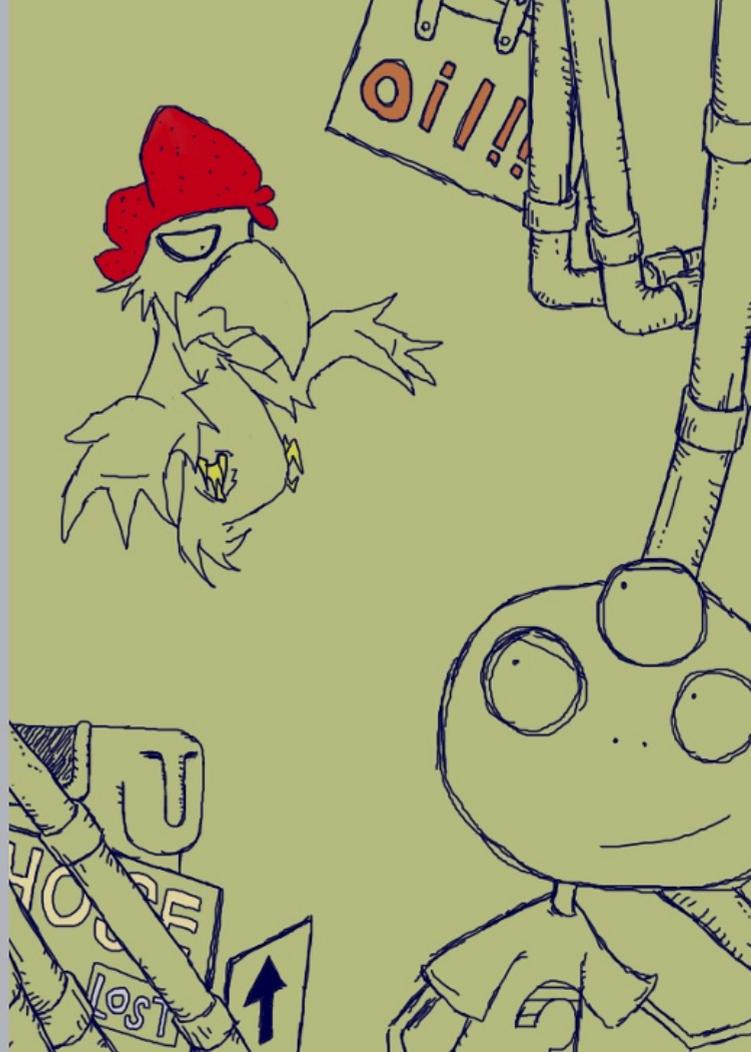


少年は慌てて走り出しました。
このままでは時間は永遠に止まったままに
なってしまいます。
なんとしても時計の破壊を阻止しなければ、
少年の夢は叶いません。

「でも、どうするのさ!?
黄色い眼の男になんか勝てっこないよ!」

チャックの言う通りです。
ですが少年には考えがありました。

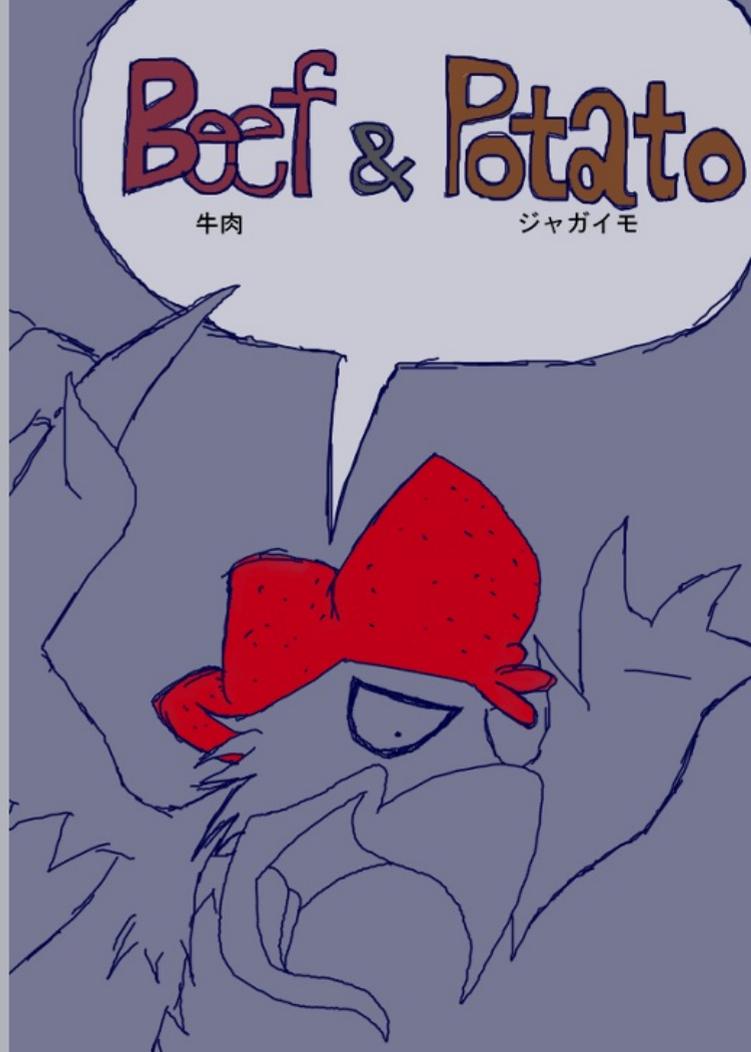
警察官の話では、黄色い眼の男は時間が止
まっているから生きていられるのです。
つまり、時の流れを元に戻し、再び時間が動
き出せば、黄色い眼の男を倒せるはずです。



時計はなぜ止まってしまったのか。

少年は考えました。
時の流れを元に戻すためには、時計が時刻を
指さなければなりません。
いま時計が指しているのは……

「牛肉とジャガイモだ！！
そうか！オイラ分かったよ！
時計は肉じゃがを食べたいんだ！！」



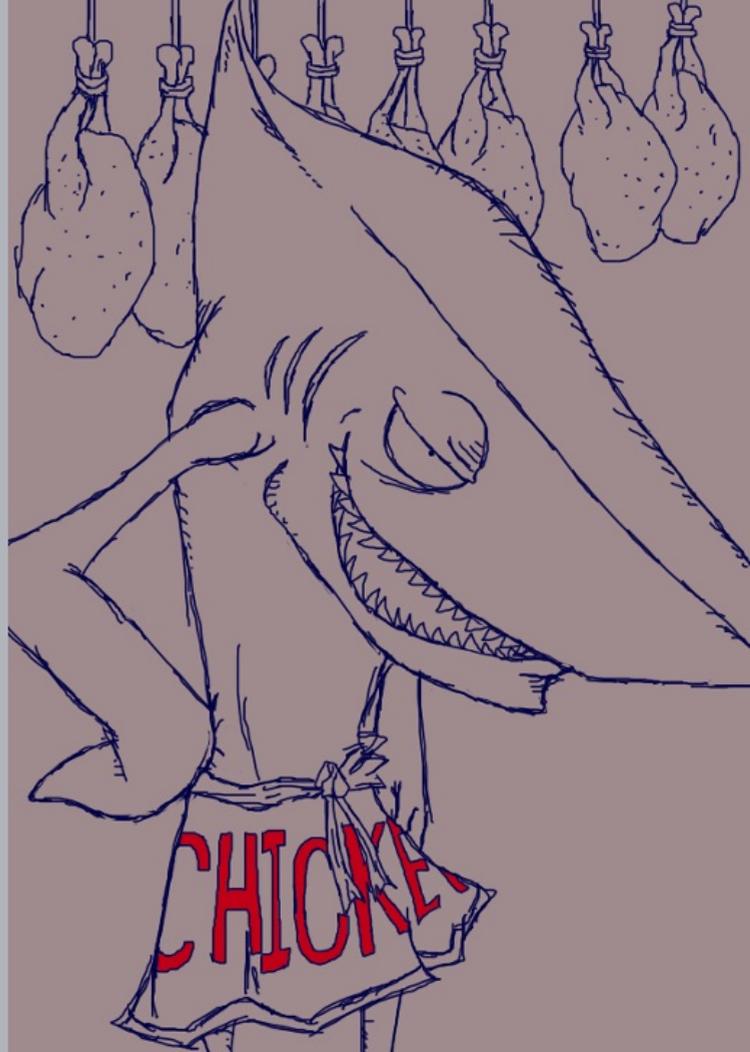
少年はすぐさま肉じゃがを作ることが出来るような料理人のもとへと向かいました。
チキン料理の店です。

「うう、早く終わらせてくれよ……」
チャックは怯えながら言いました。

少年は店主に事情を説明し、特別に肉じゃがを作ってもらいました。

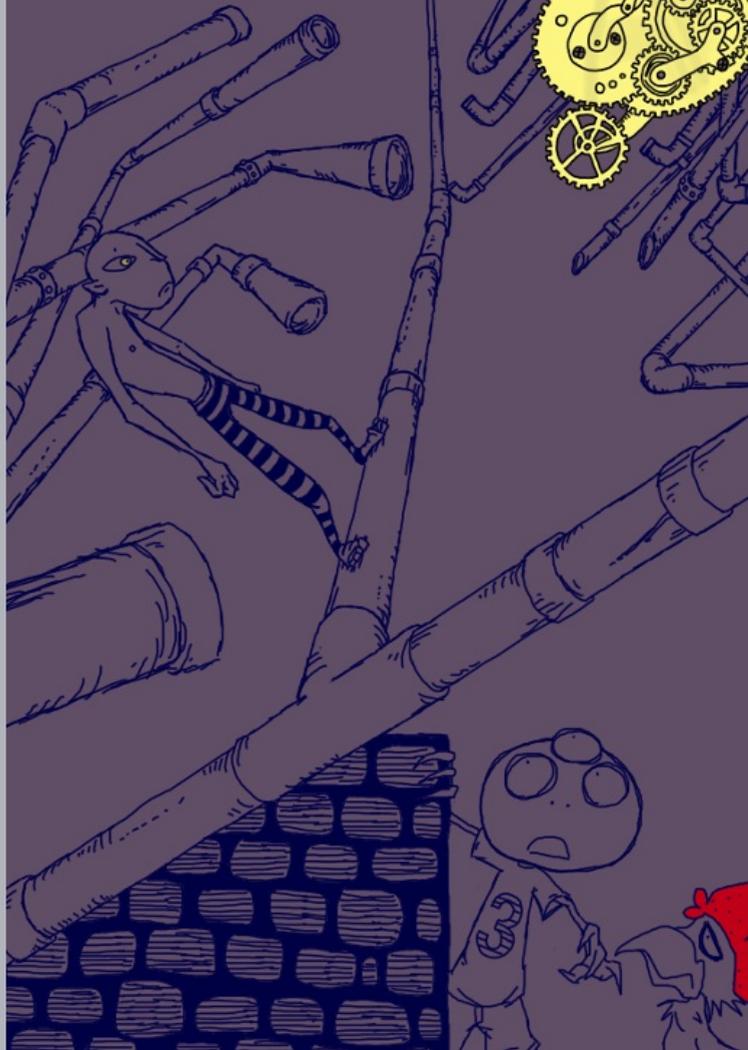
「オレの料理が役に立つんなら大歓迎さ！
もし時間を元に戻せたら、ウチの自慢の料理をご馳走してやるぜ！」

少年とチャックは複雑な表情をしつつ店を後にしました。

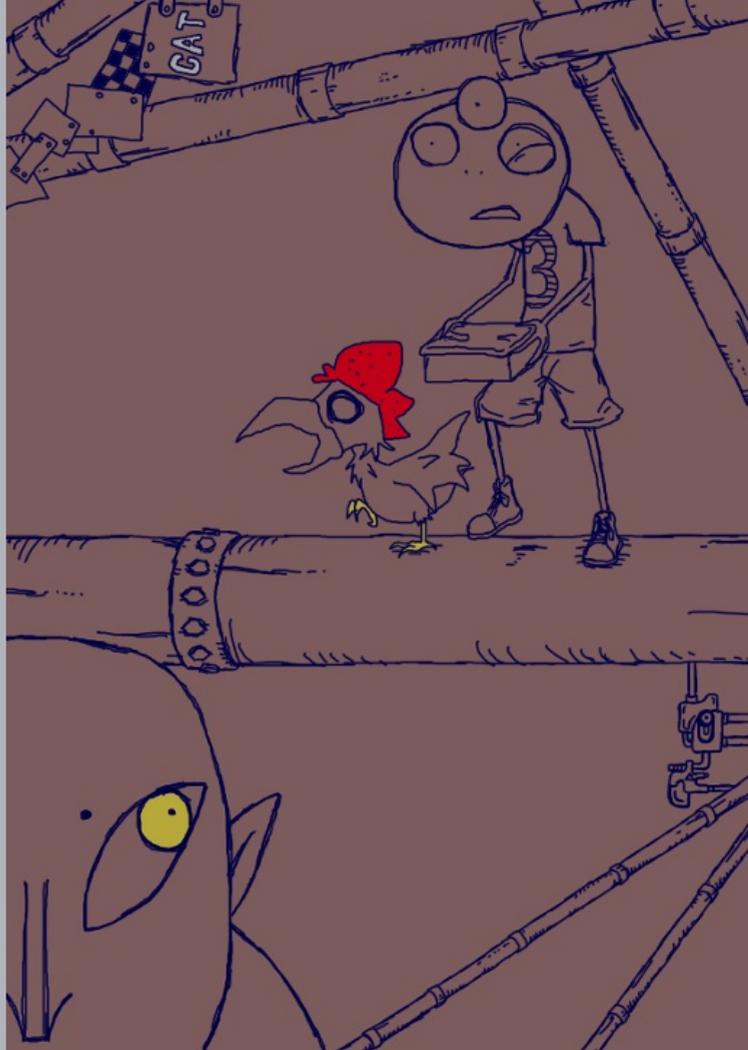


そして、少年とチャックは時計の場所まで
やって来ました。
そこには、すでに黄色い眼の男もいました。

少年は気づかれないように時計に近づいてい
きます。



ですが、黄色い眼の男は少年を見逃しません
でした。

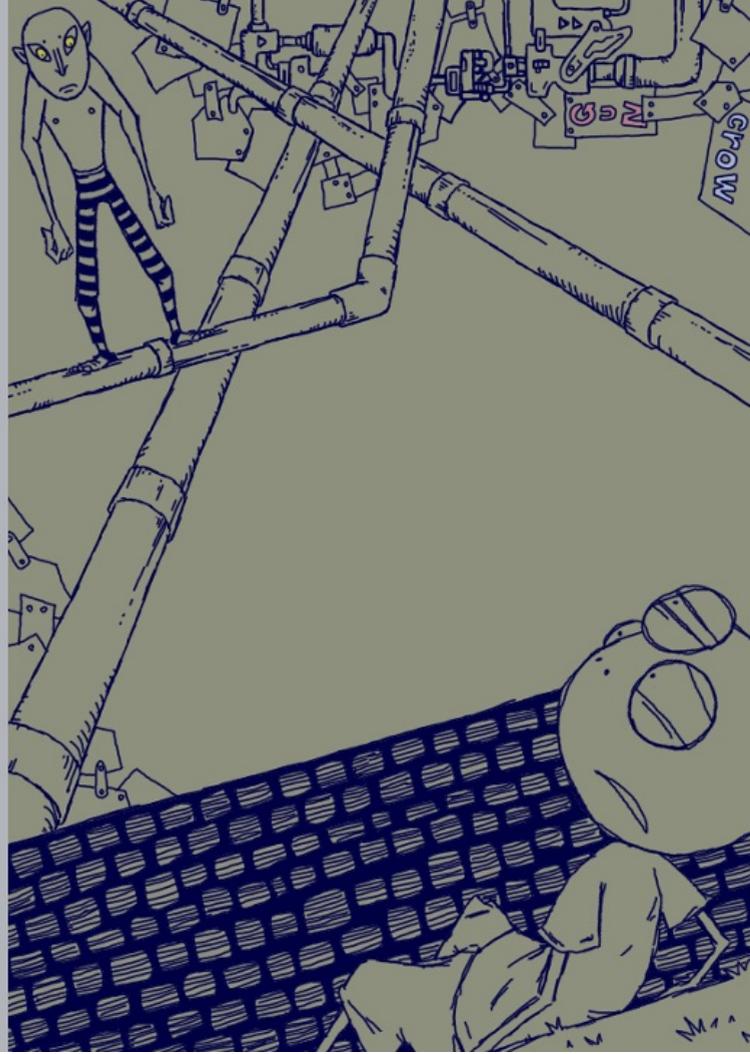


そして、黄色い眼の男は、少年に手の平を向けました。
少しためらいましたが、自分が生きるためには時計を壊すしかありません。
邪魔されるわけにはいかないのです。

手の平からは突風が巻き起こり、少年とチャックを吹き飛ばしてしまいました。



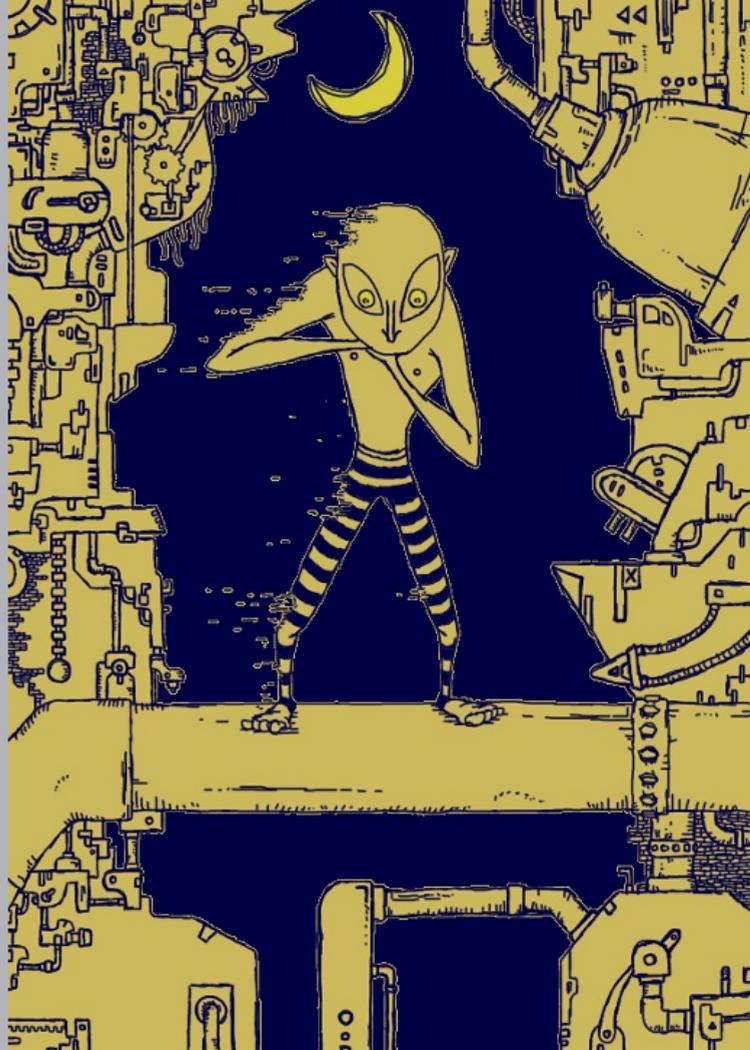
少年には、もうどうすることも出来ません。
肉じゃがもどこかへ吹き飛ばされてしまいました。



そのときです。
突然、黄色い眼の男は苦しみだしました。

そして、徐々に体が消えていき、なくなって
しまいました。

気がつくと辺りはすっかり暗くなり、いつの
間にか夜になっていました。

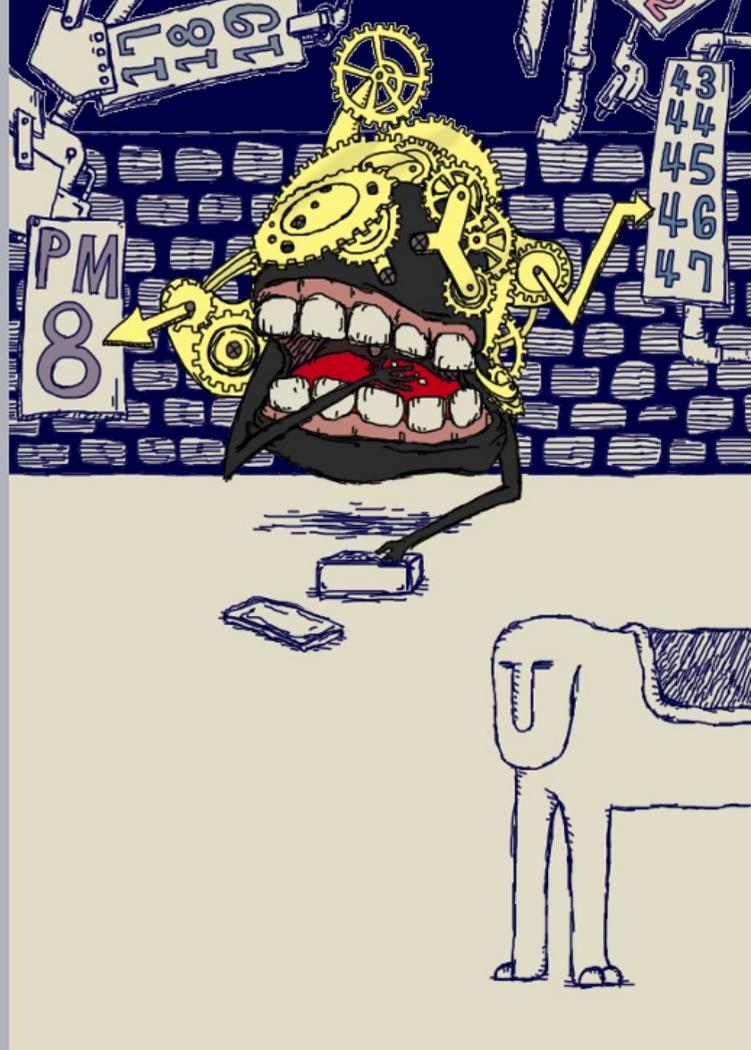


少年は時計を捜しました。
すると、なんと吹き飛ばされたはずの肉じゃがを
食べながら、きちんと時刻を指しています。

時の流れが元に戻り、一瞬で何時間も経った
ことで、黄色い眼の男の体に毒が回り、倒れた
のです。

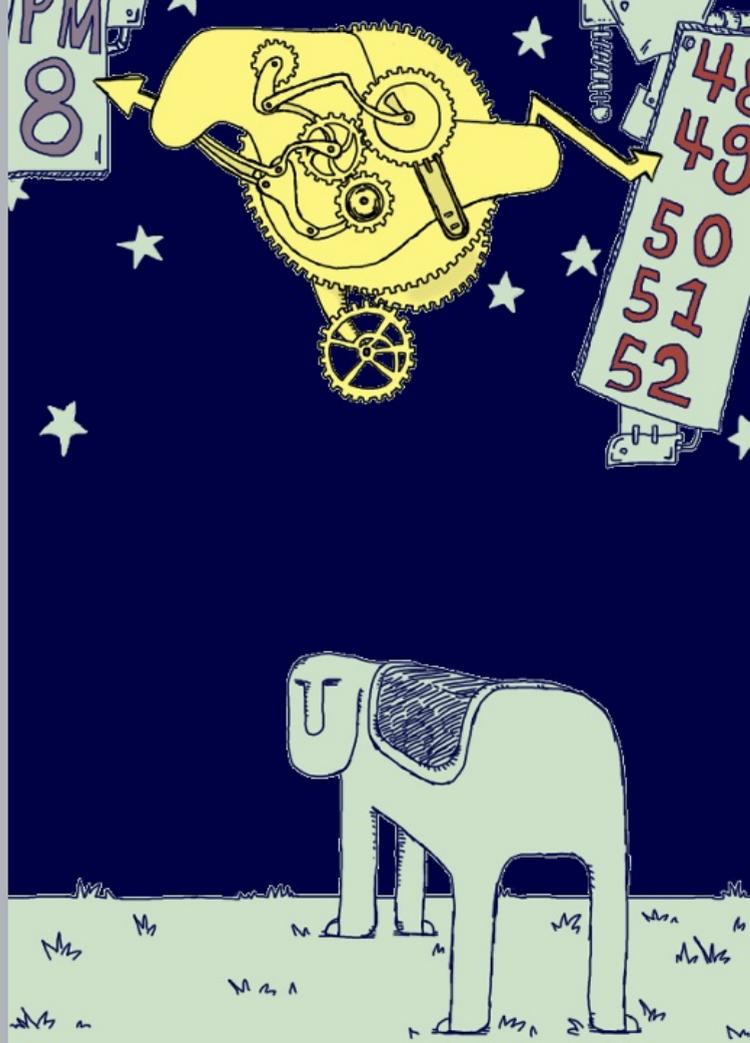
吹き飛ばされた肉じゃがは、少年の後をひそ
かについて来ていたイヌが、時計に渡したの
でしょう。

時計は、とても美味しそうに肉じゃがを食
べていました。



時計は肉じゃがを食べ終わると、ふわふわと浮かび上がり、どこかへ向かいました。もちろん時計の針はきちんと時刻を指したままです。

イヌはじっと少年を見つめたあと、時計と共にどこかへ消えて行きました。



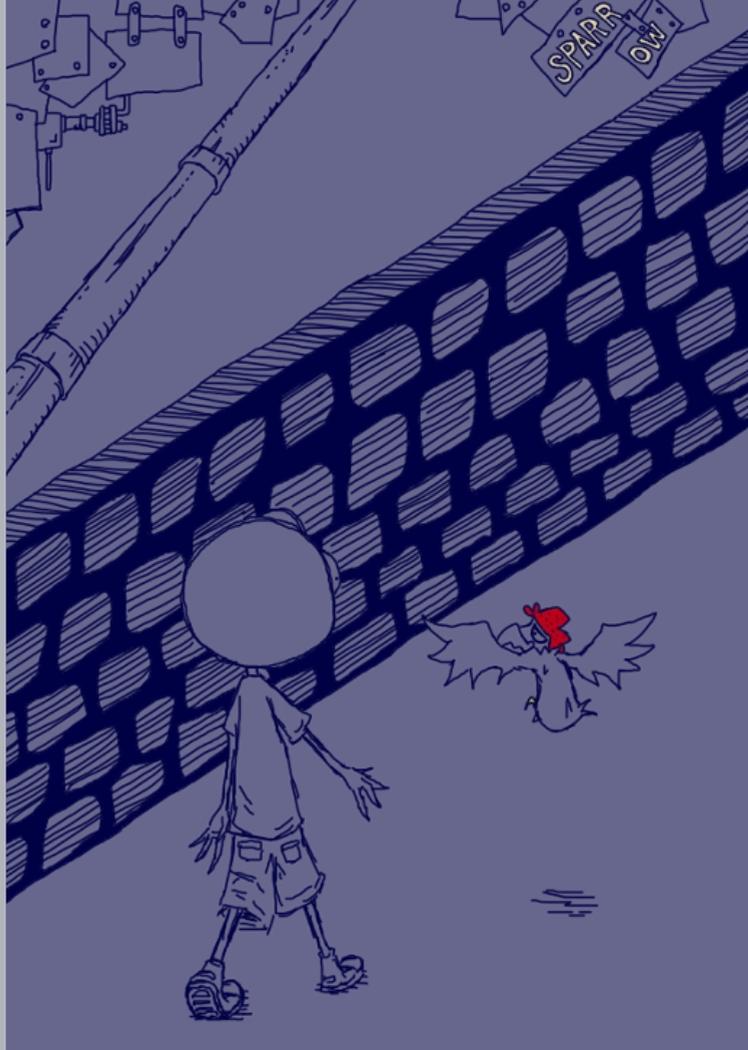
夜になったせいか、少年はなんだか眠くなってきました。

「長い一日だったよ、まったく」

チャックもぐったりしています。

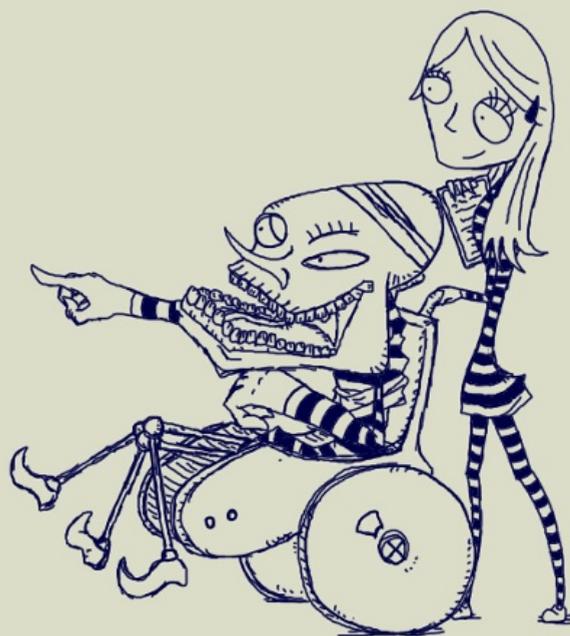


さいわい、ここから家まではそう遠くありません。
少年とチャックは、一緒に家へと帰っていき
ました。



これは、まだ世界が時計の針で動いていた時代の話。

おしまい



三つ眼少年と首だけチャック

<http://p.booklog.jp/book/38797>



著者：ニジェマス

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/samejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38797>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38797>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.